小 学 校

平 成 4 年 度

教育研究員研究報告書

道　　徳

東京都教育委員会

平成４年度　教育研究員名簿

第　1　分　科　会

地区名	学　校　名	氏　　名
港	檜　町　小	勝　田　千香子
新　宿	鶴　巻　小	□日　尾　廣　明
台　東	浅　草　小	◎清　原　洋　子
世田谷	二　子　玉　川	大　串　　亮
北	滝野川第四小	小　林　順　子

地区名	学　校　名	氏　　名
練　馬	石神井東小	山　本　真　弓
青　梅	第　4　小	並　木　早　苗
昭　島	中　神　小	○川　原　利　明
調　布	第　三　小	染　谷　由　之
町　田	相　原　小	首　藤　ユリ子

第　2　分　科　会

地区名	学　校　名	氏　　名
江　東	第三砂町小	長谷川　浩　一
品　川	第一日野小	齋　藤　　純
渋　谷	長　谷　戸　小	○木　村　繁　治
練　馬	春　日　小	生　方　佳　世
足　立	伊　興　小	藍　澤　恭　子

地区名	学　校　名	氏　　名
江戸川	小　松　川　小	長　倉　崇　子
八王子	長　沼　小	□上　宮　良　一
府　中	新　町　小	吉　川　弥　生
日　野	高　幡　台　小	千　葉　正　美
東村山	久　米　川　小	高　倉　滋　子

第　3　分　科　会

地区名	学　校　名	氏　　名
大　田	仲　六　郷　小	横　山　郁　子
世田谷	八　幡　小	□今　井　秀　二
杉　並	杉並第五小	○岡　野　由紀枝
板　橋	志村第一小	篠　崎　厚　子
足　立	千寿本町小	鈴　木　智　之

地区名	学　校　名	氏　　名
葛　飾	住　吉　小	西　原　　宏
江戸川	南篠崎小	安　江　恵　子
立　川	第　四　小	渋　谷　俊　夫
東久留米	小　山　小	◎山　本　　誠
多　摩	西愛宕小	櫻　井　光　子

◎全体世話人　◎全体副世話人　○分科会世話人　□分科会副世話人

担　当　課　長　　小　島　　宏　　教育庁指導部初等教育指導課

担当主任指導主事　　橋　本　誠　司　　教育庁指導部

研究主題　豊かな心を育てる道徳授業

目　　次

○　研究主題について …… 2
○　研究の概要 …… 3
○　研究の成果と課題 …… 3

Ⅰ　自己を深く見つめさせる指導法の工夫　（第１分科会）
1.　主題設定の理由 …… 4
2.　研究の内容と方法 …… 4
3.　自己を深く見つめさせる指導法 …… 5
4.　授業研究事例
(1)　第５学年　資料名「言葉のおくりもの」 …… 8
(2)　第４学年　資料名「絵はがきと切手」 …… 9

Ⅱ　一人一人の心に響き合う指導法の工夫　（第２分科会）
1.　主題設定の理由 …… 11
2.　研究の内容と方法 …… 11
3.　一人一人の心に響き合う指導法 …… 12
4.　授業研究事例
(1)　第６学年　資料名「いつまでも仲間」 …… 16

Ⅲ　児童の心をゆさぶる指導法の工夫　（第３分科会）
1.　主題設定の理由 …… 18
2.　研究の内容と方法 …… 19
3.　児童の心をゆさぶる指導法 …… 20
4.　授業研究事例
(1)　第６学年　資料名「浩司と捨て猫」 …… 22
(2)　第５学年　資料名「銀のろうそく立て」 …… 23

研究主題　豊かな心を育てる道徳授業

○　研究主題について

道徳教育は、児童一人一人がよりよく生きたいという願いを実現させるために、その基盤となる道徳性を養う教育活動である。人間としてよりよく生きようとする姿勢そのものが、人間としてのよさであり、その過程において身に付ける様々な力が、その人らしいよさとして独自性を形成して行くのである。

日々の学校生活の中では、鉄棒のさかあがりができない子に、自分なりに教えてあげたり、草花の世話をしその成長を楽しみにしているなど、何気ない動作の中に、自分のよさや可能性を生かしお互いを認め合う心や自然を愛する心をもった心豊かな児童の姿が見受けられる。

このように、豊かな心とは、人間としてよりよく生きていこうとする過程の中で身に付くものであり、自ら生きる喜びを感じ、人の心の痛みや優しさがわかり、美しいものに感動し、人と共に成長しようとする心であると考えている。

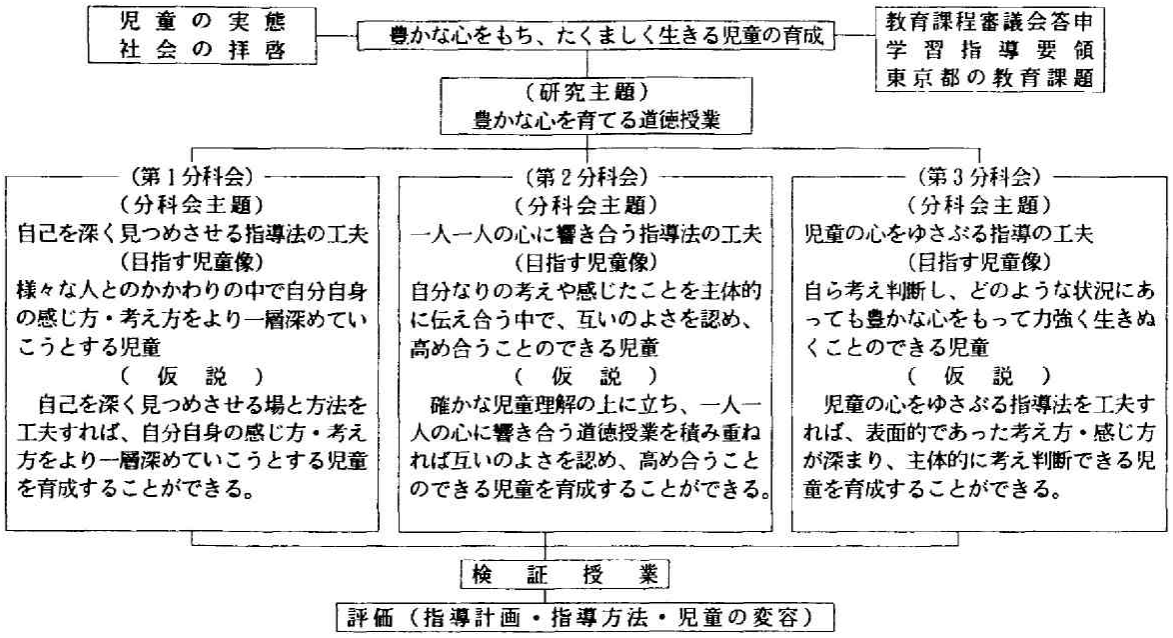
しかし、「最近、授業がパターン化してきた」「授業が表面的に流れ、児童の内面にせまれない」「児童の思いや願いを生かしきれない」など、道徳の授業に対する課題が、研究員一人一人の自省の中から出てきた。

そこで、「豊かな心をもち、たくましく生きる児童の育成」を目指して道徳の授業改善を図るため、次のような３つの分科会主題で研究することにした。

第１分科会は、様々な人との関わりの中で、自分自身の感じ方、考え方をより一層深めていこうとする「自己を深く見つめさせる指導法の工夫」、第２分科会は、自分なりの考えや感じたことを主体的に伝え合う中で、互いのよさを認め、高め合う「一人一人の心に響き合う指導法の工夫」、第３分科会は、自ら考え判断し、どのような状況にあっても豊かな心をもって、力強く生きぬくことのできるように「児童の心をゆさぶる指導法の工夫」である。

私達は、児童一人一人の思いや願いを十分に発揮させ、その子のもつ道徳性のよさを認め、励ますことのできる道徳の授業を創造していきたいと願っている。日々の実践を大切にし、授業研究を積み重ねながら、その望ましい在り方を追求したいと考え、本研究主題を設定した。

○　研究の概要



○　研究の成果と課題

第１分科会では、今児童に必要なことは、相手の気持ちを思いやる心であるという共通理解のもとに、内容項目２の柱に焦点を当てた。児童のよさに着目しつつ「自己を深く見つめさせる」ために、役割演技や話し合い、書く作業等をどのような視点で具体化していくことが最も効果的であるか検討し、研究を進めてきた。その結果、児童が多様な感じ方・考え方に出会う中で自己を見つめ、価値を主体的に自覚するようになってきた。

第２分科会では、豊かな心を、関わり合いの中で培われていく思いやり、協調性、表現力、主体性等ととらえ、「一人一人の心に響き合う」指導法として、確かな児童理解の上に立った資料の選択や開発、話し合い、役割演技等、指導過程の工夫を行ってきた。その結果、表現力が豊かになり、児童一人一人が主体的に活動する姿が見えるようになってきた。

第３分科会では、「児童の心をゆさぶる」ことによって道徳的心情や判断力を高め、主体的に考え実践していこうとする児童を育成しようと考え、資料の吟味や提示、発問の工夫、指導過程の在り方等を研究した。その結果、児童の心をゆさぶるには、資料に感動させることや葛藤させることが有効であることが改めて分かり、児童の見方、考え方が深まり、主体的に判断するようになってきた。

今後、各分科会が設定した仮説をより確かなものとするため、残された課題の解決に向けて様々な指導法を追究していく必要がある。今までの成果を生かしながら、児童の思いや願いを十分に生かし、児童が心待ちにするような道徳授業を目指していきたい。

Ⅰ　自己を深く見つめさせる指導法の工夫（第１分科会）

1.　主題設定の理由

道徳の時間は、ねらいとする価値を児童一人一人が主体的に自覚し、より高められた価値観に照らして、今までの自分、つまり過去から現在にかけて自分がしていたこと、考えていたこと、感じていたことなどを事実としてしっかりと見つめる時間である。自分がどういう人間であり、どういう生き方をしていたのか、自分自身に正面から取り組むのである。これからどうするか、どうしようかなど、自分の考えを述べさせるのではなくて、ありのままの自分を見つめさせることが大切であると考える。

日々の道徳の授業をみると、ねらいとする価値を一人一人が自分のこととしてしっかり感じ、考える時間としながらも、教師はとかく筋道だった内容にとらわれたり、児童の行動や態度にのみ目を向けがちになったりするといったむきも時としてみられる。児童一人一人に、見えないものを見つめさせ、聞こえないものを聞かせ、深く感じる心を養うことが、道徳教育の基本として、今、私達教師に求められている。

日々の生活の中で児童の実態を考えてみると、明朗・快活であり、自分の考えを素直に表現できるというよさがあげられた。更によりよい人間関係を築いていくためには、他の人との関わりの中で自分の生き方、考え方をしっかり見つめさせる必要がある。

第１分科会では、「自己を深く見つめさせる指導法の工夫」を分科会主題とし、内容項目２の柱である「主として他の人とのかかわりに関すること」を重点内容として取り組み、研究主題である「豊かな心を育てる道徳授業」を目指そうと考えた。

2.　研究の内容と方法

(1)　研究主題の設定

(2)　「自己を深く見つめさせる」手立てについて

(3)　指導法の工夫

導入 ――― ねらいとする価値への関心や心構えをもたせるための工夫

展開 ――― （前段）多様な価値観に出合わせる工夫

（後段）生活を振り返らせる工夫

終末 ――― 感じたこと考えたことを整理し、まとめをするための工夫

(4)　授業研究（指導案の立案・内容の検討・授業の実施）

3. 自己を深く見つめさせる指導法

(1) 「自己を深く見つめさせる」とは

道徳の時間は「自己を振り返る時間である」とよく言われる。それは、ねらいとする価値に関して自己を深く見つめるということにほかならない。

さて、学校生活の中で、児童の活動を見てみると、朝登校して級友と顔を合わせてから、会話を重ね、また学習や遊びを通して、友達との関わりを深めている。

例えば、運動会の時期、組体操のピラミッドの練習を始めた頃は、上の段下の段を問わず児童は不平不満を言い合う。しかし、そういう中で「皆、我慢し、頑張ろうとしている」という気持ちが徐々に分かり合ってくると、友達に不平不満を言わなくなってくる。それは、人との関わりの中で、体験を通して自ら主体的に考えていったことによるものである。

この過程を児童の気持ちや考え方に着目して整理すると、次のようになる。

学校生活や学級生活を共にしている友達がいるけれど、感じ方・考え方において自分との関わりを明確に意識できずに漠然とした状態でいる。

↓

次に、いろいろな場面での友達の言動を見聞きして、自分とは違う感じ方・考え方をする友達がいることに気付く。

↓

そして、今までの自分の感じ方・考え方はこういうことだったと気付く。

↓

それらを踏まえて、自分自身の感じ方・考え方をより一層高めていこうとする。

つまり、日頃意識せず、漠然としているような状態から、友達の様々な感じ方・考え方に触れて、児童の目が自身の内面へと向かい、どのような生き方をしていったらいいかを主体的に考えるようになるということである。

道徳の時間において、ねらいとする価値に関してこういった過程を踏まえさせることが「自己を深く見つめさせる」ことになると考えた。また、それが実践意欲につながっていくものであると考える。

(2) 自己を深く見つめさせるための重点内容

道徳の時間は自己を振り返る時間である。それは、ねらいとする価値に関して児童一人一人が、今までの自分がどうであったかを見つめるということである。すなわち、具体的な場面や相手の言動を通して学びながら、主体的に価値を自覚していこうとすることにほかならない。相手の感じ方・考え方との関わりの中で、より鮮明に自己を見つめていくことができるのである。

第1分科会では、内容項目2の柱（主として他の人とのかかわりに関すること）を重点として、相手の立場に立った感じ方、考え方について深く考えさせること、すなわち、相手の立場や考えを尊重し、受容していく姿勢を大事にする中で、児童一人一人が自己を深く見つめ、自己のよさを発見し、そのよさを生かしていくことができると考えた。

このような考え方に立ち、重点とする価値内容を次のように捉えた。

・ 礼　儀 とは、相手の立場に立ち、その場に適した言動を通して自分の心を表すものであり、互いにかけがえのないものとして、適切な接し方を深く考えていかなければならないものである。

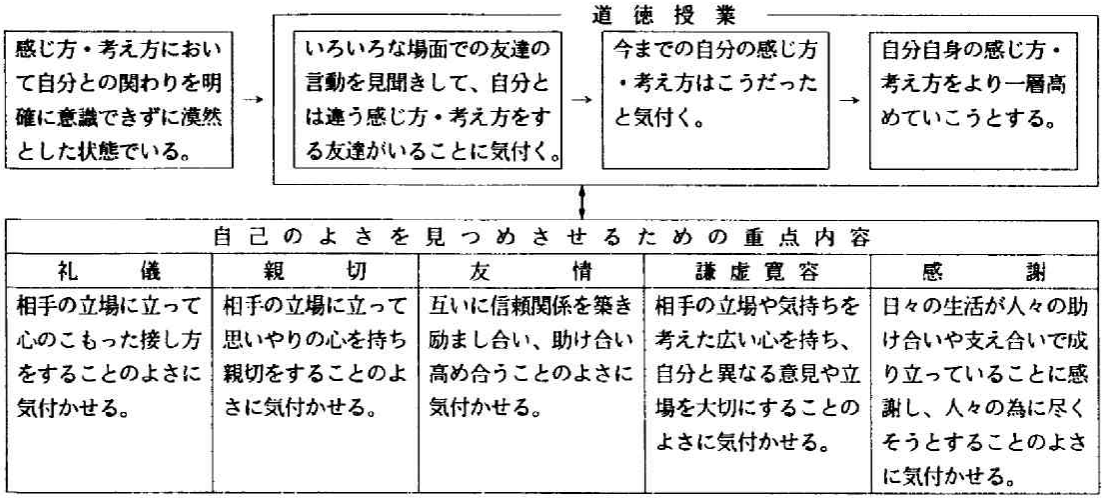
・ 親　切 は、相手を思いやる気持ちが基盤となる。具体的な場面や相手の言動を通し、自分の感じ方や考え方も磨かれていくものである。

・ 友　情 とは、相互の信頼関係がなければ築くことができないものである。自分自身の過去や現在を振り返りながら互いに助け合い、励まし合いながら高め合っていくことが大切である。

・ 謙虚寛容 では、相手の立場や気持ちを考えた広い心をもつことが大切である。それは、相手の意見や考えを認めたり、尊重したりすることと同時に、絶えず自分を見つめる姿勢を保っていかなければならない。

・ 感　謝 とは、何かをしてもらって当然という感覚ではなく、常日頃から互いに助け合い支え合いながら生活を送っているという内面の自覚を持たせることが大切である。

(3) 自己を深く見つめさせる道徳授業



(4) 自己を深く見つめさせる指導法の工夫

	段階	内容	自己を深く見つめさせる指導法の工夫(★は特に関連の深い手だて)
導入	1. 授業への方向付けをする。	価値への導入を図る。 生活経験の想起をさせる。 資料への導入を図る。	＊いくつかの価値観に触れ、ねらいとする価値への関心や心構えを持たせ、自己を見つめさせる。 ・視覚や聴覚に訴える工夫 （価値に関する言葉のカード　ＶＴＲ　実物） ・体験談や事前調査の工夫 （以前の身近な体験　アンケート）
展開前段	2. 中心資料を用いて、価値の追及・把握をする。	資料に登場する主人公の気持ちを中心に考えさせる。	＊資料中の主人公の感じ方や考え方に共感させ、発表の場を通して多様な価値観に出会わせ、自己を深く見つめさせる。特に話し合いや役割演技では、一人一人の考え方の多様性を大切にさせ、また主人公を通して自己内対話をさせ、自己のよさを見出ださせる。 ★話し合いや意図的指名の工夫 ★役割演技や動作化 ・資料提示や発問の工夫 ・価値観の類型化
展開後段	3. ねらいとする価値の主体的自覚を図る。	自分自身の生活に目を向けさせる。	＊自分の生活を振り返り、自分の問題として捉えさせ、自己を深く見つめさせる。特に書く作業では、自分の考えを体験を基にして捉え直し、その過程で自己のよさを見出ださせる。 ★書く作業の工夫 ・話し合いや意図的指名の工夫 ・発問の工夫 ・価値観の類型化
終末	4. 整理・まとめをする。	１時間の授業の整理・まとめをする。	＊１時間の授業を通し、感じたことや考えたことを整理し、まとめさせることにより自己を見つめさせる。 ・教師の説話 ・児童の作文や詩

4. 授業研究事例

(1) 第５学年

① 主題　男女の協力と信頼（２－③友情・信頼、助け合い）

資料名「言葉のおくりもの」

② ねらい　互いに信頼し合い、男女仲良く助け合っていこうとする心情を育てる。

③ 指導の意図　真の友情とは、人と人とのかかわりの中で共に歩み、喜びや悲しみを分かち合うことにより生まれてくる信頼関係の上に成り立つものであり、それは、男女の相互理解の上にも成り立つことに気付くことが大切である。本資料では、主人公と友達の女の子が第三者的な立場のクラスメートにからかわれ、これまでの親しい友達関係が壊れていってしまう。女の子は主人公の男の子に何とか立ち直って欲しいと自分の考えや思いを正直に訴え、それがクラスメートを含め主人公にも伝わっていく。こういったできごとは、児童の日常生活の中ではありがちであるが、自分が友達によって支えられていたり、友達の思いやりに気付かずに見逃してしまっていることが多い。そこで、当たり前のように考えたり、思ったりしている自分に気付かせることによって真の友情について見つめ直し、男女が協力し合うことの大切さに気付かせたい。

また、友情について、互いにより深く相手を理解し、助け合い、高め合っていこうとする心情を育てたい。

④ 指導の実際（中心発問および展開後段からの児童の反応）

Ｔ　すみ子さんから「言葉のおくりもの」をもらった時の一郎さんの気持ちはどうだったでしょうか。

Ｃ　あんなこと言わなければよかった。　　Ｃ　また仲良しになりたいな。

Ｃ　一郎があんなことを言ったのに、すみ子は言葉のおくりものをあげたのでよい友達だ。

Ｔ　これまでの自分たちの生活の中で、男女が協力し合った時はどんな時でしたか。

Ｃ　掃除をみんなでやった。　Ｃ　国語の段落のまとめを力を合わせてやった。

Ｃ　体育の時、リレーやドッジボールなど、協力して２組に負けないようにした。

⑤ 考察

○ 導入で、事前に調査していた「友達のよいところ」を書いたカードの提示は、ねらいとする価値への関心をもたせるのに有効だった。

○ 展開前段での動作化（迷惑そうな顔）は、一郎の心情にせまるきっかけとなった。

(2) 第4学年

① 主題　真の友情（2－③友情・信頼、助け合い）

資料名「絵はがきと切手」

② ねらい　友達同士互いによく理解し、信頼し、助け合って友情を深めていこうとする心情を育てる。

③ 指導の意図　人は多くの人とのかかわりの中で生活している。日々の生活をよりよく過ごすためには、望ましい人間関係作りが必要である。そのためには、相手の立場をよく理解し、信頼し助け合うことが大切である。

児童の中には、学級の仲間に励まされたり助けられたりして、楽しい思いをしたり、できなかったことに自信がもてるようになったりする体験は多い。さらに深い信頼関係を結ばせるために、本資料を通して、本当に相手のことを考え信頼しているからこそ、言い難いことでも注意しようとする主人公に共感させ、真の友情とは、互いにかばいあって楽しく過ごすだけでなく、時には厳しさを伴うものであることに気付かせたい。

④ 指導法の工夫（★は、特に分科会主題と関連の深い手立て）

		具体的な手立て
導入		○ 価値に関する言葉のカード（「友だち」の提示） ○ 実物提示（絵はがき）
展開	前段	○ 一枚絵の提示（葛藤場面） ★ 主人公の迷う心に共感させる中心発問 ★ 板書の工夫（児童の価値観の類型化）
	後段	★ 書く活動　（自分の生活を振り返る。「心ノート」の活用） ○ 意図的指名（視点をはっきりさせる。）
終末		○ 歌「友だちはいいな」（友達のことを思い浮かべながら歌わせる）

⑤ 指導の実際（展開前段の発問と主な児童の反応）

T　こんなに大きな絵はがきをもらってどんな気持ちになったでしょうね。

C　うれしい。

C　自分も行ってみたい。

C　私のこと覚えていてくれたんだ。

T　部屋に入って一人でどんなことを考えていたのでしょうか。

C　どっちの言葉を書いたほうがいいかな。

C　正子さんが次から間違えないように教えた方がいい。

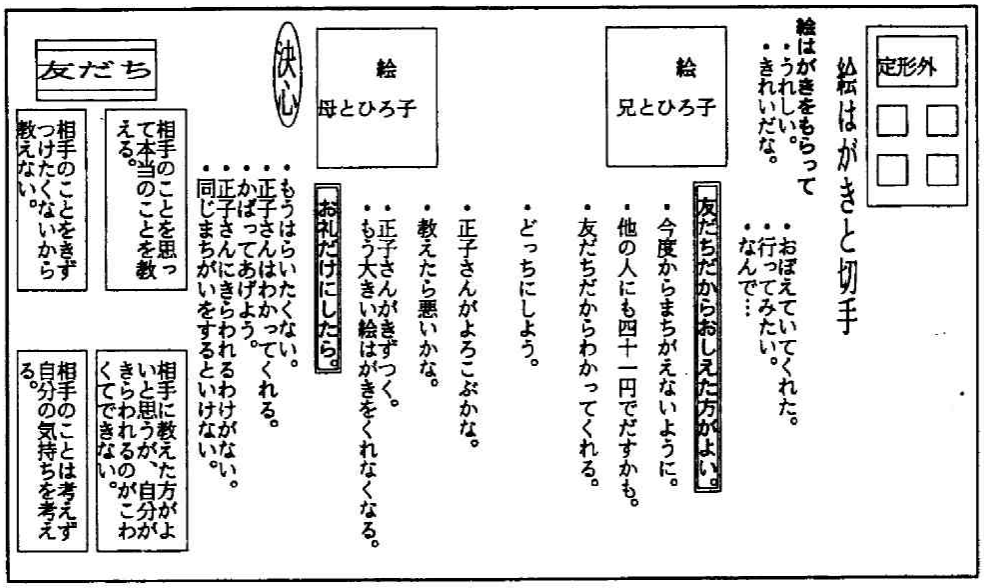
C　書くと、もう大きな絵はがきをくれなくなるかもしれない。

T　書くことに決めたのは、どんな気持ちがあったからでしょう。

C　他の人に同じことをしないように。

C　正子さんはわかってくれるだろう。

＜板書の実際＞



⑥　考察

○　導入段階で、カードによる価値への導入と、実物提示による資料への導入の両方扱ってみた。「友だち」のカードと定形・定形外郵便の実物提示は効果的だった。

○　類型化した価値観に照らして自己を見つめさせる段階では、児童のつぶやきも聞こえて、個々には発表させなかったが、手立てとしては有効だった。

○　展開後段に書く作業を取り入れることによって、今までの自分の思いをまとめることができ、自己を振り返ることができた。

○　児童の発言を類型化して板書整理したことにより、児童は多様な価値観にふれる中で自分自身の感じ方・考え方を問い直すことができた。

○　事前に、友情に関する価値観について調査してあったが、授業の中や事後に、調査をどのように生かし活用していくか、更に検討していく必要がある。

II　一人一人の心に響き合う指導法の工夫（第２分科会）

1.　主題設定の理由

最近の児童は、人前に出てもものおじせず、自分の考えをのびのびと発言したり、明るく行動したりすることができる。また、テレビやマンガ、電子ゲームなどの映像情報をうまく使って生活を楽しんでいる。

しかし、これまでの知識中心の学力観や地域環境の変化などの影響を受け、児童は塾通いや習い事のスケジュールに追われ、友達同士が時を忘れて思う存分遊ぶというような光景はほとんどみられなくなっている。自分さえ良ければいい、わずらわしいことを避けようとするような大人社会の風潮をそのまま子供たちが演じているかのようであり、児童相互の人間関係が希薄になってきている。

また、核家族化、少子化、母親の就労の増加などにより、家庭生活においても心のよりどころとなるような温かい交流が不足しがちになってきたため、対人関係の中で培われるべき思いやりの心、協調性、表現力などが育ちにくくなっている。そこで、他者の傷みを分かち合う心、共によりよく歩む心、自分の思いや感情を伝え合う心を育てたいと考えた。

第２分科会では、自分なりの考えや感じたことを主体的に伝え合う中で、お互いのよさを認め高め合うことのできる児童の育成を目指した。そのためには次の点が必要であると考えた。①　授業の中で児童に自分なりの考えや感動をしっかりつかませる。②　その感動を素直に表現させる。③　他者の気持ちを分かち合い、他者の感動にも共鳴させる。④　これらを主体的に行動に移せるような広く大きな心を持たせる。

特に道徳の授業においては、周囲の人々と主体的にかかわり合い、互いによりよい自己を求め、人間としての生き方について考え合うことが大切である。そこで、新しい学力観に立った質的授業改善を試み、児童主体の「響き・響き合う授業」の創造をねらったのである。

このような授業を積み重ねることにより、豊かな心をもった児童の育成に迫れると考え、本主題を設定した。

2.　研究の内容と方法

(1)　研究主題の設定（研究主題と目指す児童像・仮説・研究構造図）

(2)　「一人一人の心に響き合う」について

(3)　指導法の工夫（指導過程・資料提示・発問・表現方法）

(4)　授業研究（指導案の作成と検討・授業の実施・分析と考察）

3. 一人一人の心に響き合う指導法

(1) 「一人一人の心に響き合う」とは

まず、「心に響く」とは、児童が資料中の登場人物の言動、主人公の置かれた状況や場面、心の悩み、他の児童の発言、教師の発問や説話などについて、「共感する」「感動する」「琴線に触れる」ことである。これは、児童一人一人を対象とした捉え方であり、児童の受動的な営みによって成り立っている。

この上に立ち、「心に響き合う」とは、自分以外のものから響かされるだけでなく、自分からも主体的に相手に響きを返し、それを一層厚い響き合いにしようとする、児童自らの積極的な営みをねらうものである。

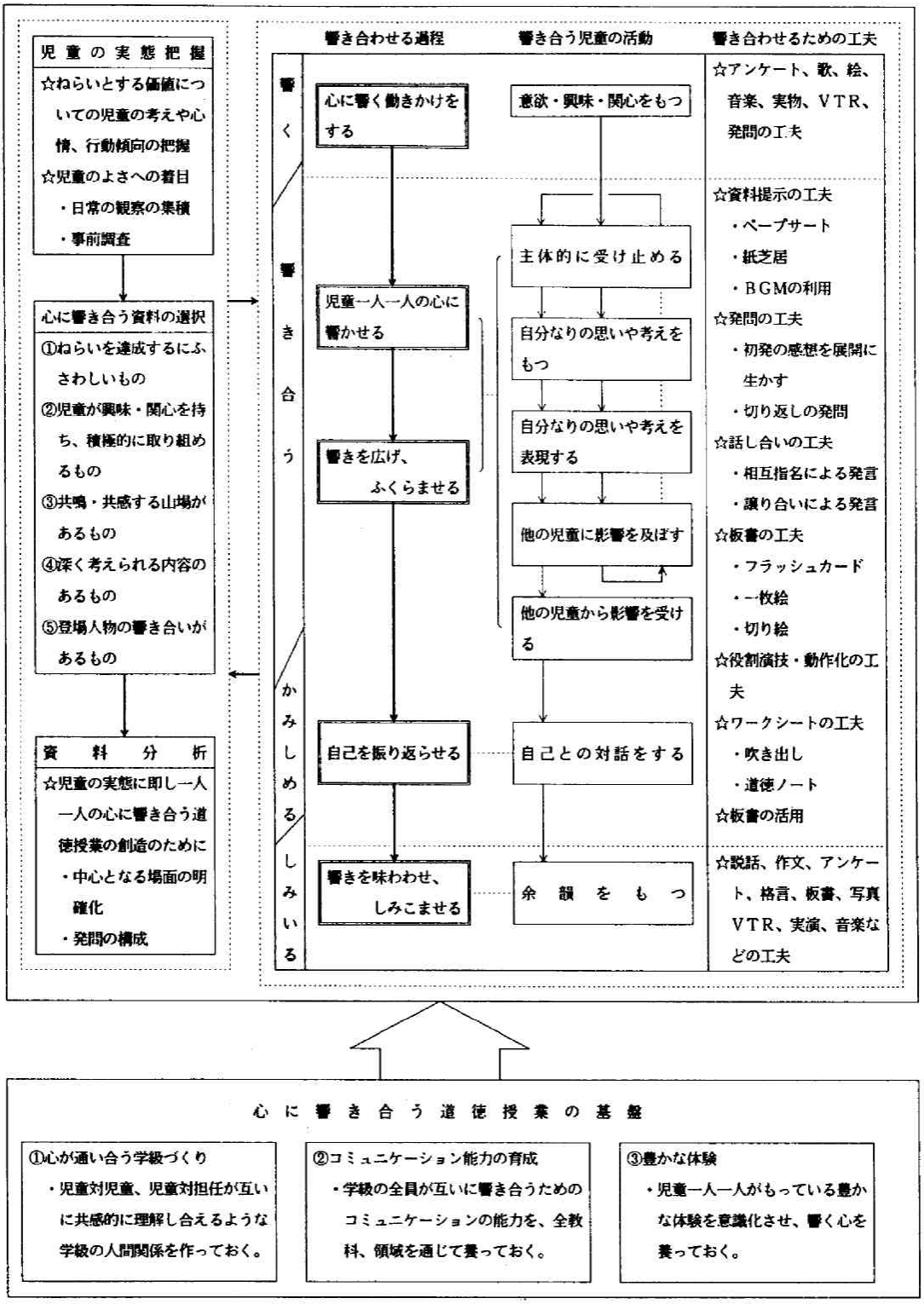
学級全体として、相互に積極的なかかわり合いをすることにより、学級が有機的な結び付きをしていくことを意図しているのである。

(2) 「心に響き合う」過程

児童一人一人が、ねらいとする価値について深く感じ、考え、自己の対話を深めていく道徳の授業は、学級という多人数の中で行われる。学級の児童は、それぞれ異なった思いや考え方をもっており、授業は多様な価値観の中で行われる。それぞれの思いや考え方を互いに表現し合い、相手の表現をしっかり受け止め、影響し合いながら、児童一人一人がより高められた価値観に対して、心の奥底から共鳴したり、共感したり、納得したりしていきながら、ねらいとする価値をより深く内面的に捉えていく過程を、「心に響き合う道徳授業」とし、次のような①～⑧の段階を経て、授業のねらいに迫れるものと考えた。

①…児童自らが主体的に受け止める。
②…自分なりの思いや考えをもつ。
③…自分なりの思いや考えを表現する。
④…他の児童に影響を及ぼす。
⑤…他の児童から影響を受ける。
⑥…①～⑤を繰り返す。
⑦…自己との対話をする。
⑧…余韻をもつ。

(3) 一人一人の心に響き合う道徳授業の構造



(4) 「響き合う」指導法の学年の重点

一人一人の心に響き合う道徳授業を創っていくためには、その基盤として前図（P.13）のように、心が通い合う学級づくり・コミュニケーション能力の育成・豊かな体験が重要であるが、日々の授業においても「響き合う」指導の積み重ねが大切である。

そこで、児童の発達段階を考慮し、次のように学年の重点を設定し、授業の中に生かそうと考えた。

低学年	中学年	高学年
響き合いを受け止める	互いに響き合う	より高い響き合いを起こす

(5) 一人一人の心に響き合う指導法の工夫

① 児童理解

児童一人一人が授業の中で生かされるためには、日々の学級経営を通して確かな児童理解がなされることが大前提である。何よりも「一人一人のよさ」に着目し、また、一時間の授業のねらいとする価値についての考えや行動傾向を把握した上で、指導法の工夫がなされなければならない。

授業の中でも、児童理解は重要である。それぞれよさをもった児童たちが一時間の中でどう生かされ、どう変容したのか刻々とらえていくことが大切である。

そのための手立てとして　ア．事前調査　イ．日記指導等日常的信頼関係　ウ．座席表活用などによる個々の記録　エ．ワークシート　オ．授業記録　などを、分析・考察することが考えられる。そして、これを繰り返し行うことにより、児童理解がより深まるとともに、授業の中で生かすことができると考えられる。

② 心に響き合う資料の選択・分析

資料に一人一人が響かなければ適切な資料とはいえない。ねらいとする価値を追求する上で効果的かどうかはもちろんである。児童にとって、分かりやすい内容であり、自分はどう考えるのか、考えをしっかりもてる内容であることが必要である。その一つとして、資料中の登場人物の問に響き合いが見られるのも有効であろう。

資料は資料分析により中心となる場面が明確化する。資料分析は、発問構成をするために有効である。

③　表現活動

児童一人一人が自分なりの思いや考えをもつことができたら、それを表現することによって互いに影響を受けたり、自分自身の考えを深めたりすることが望ましい。第２分科会でとらえた表現活動としては、以下のようなものがある。

ア　話し合い

・話すこと、聞くことを通して、自分の考えや感じ方をはっきりさせたり、自分と他の児童との考えや感じ方の違いに気付いたりすることができる。

・自分の考えや感じ方が変化したことに気付くことができる。

このような活動を繰り返し行うことにより、学級集団の中で「響き合えた」体験となり得る。

イ　書く作業（ワークシート・道徳ノートの活用）

児童は、混沌とした思いを書き表そうとする中で、次第に明確にとらえることができる。また、例えば、自分なりの思いをもっているが発表したがらない児童も、書くことによって自分を語れる場合がある。そうした児童のよさを認めたり評価したりするためにも書く作業は大切である。主題の展開に応じて、話し合いの前や後に書く作業を取り入れ、話し合いを深めたり自己を深く見つめさせたりしたい。

ウ　役割演技

役割演技は、話し言葉、書き言葉だけでは十分に表現しきれない心情や心の動きをより深く伝え、その時の状況をイメージ化させることができる。また、個と個の対応でありながら、同時に学級全体へ波のように思いや雰囲気を伝えることができる。役割演技もまた「響き合い」体験となり得る。

④　その他

ア．資料提示の工夫　イ．板書の工夫・活用　ウ．終末の工夫など、一時間の授業の中でウェートを考え、授業構成を行ってきた。

また、指導案の展開欄には「響き合うための配慮事項」を設け、常に児童理解に心がけ、一人一人のよさに目を向けていくように配慮して授業に臨んでいる。

4. 授業研究事例（第６学年）

(1) 主題　　男女の協力　（２－③　友情・信頼、助け合い）

資料名　　「いつまでも仲間」

(2) ねらい　　互いに信頼し、男女仲良く協力し、助け合っていこうとする心情を育てる。

(3) 一人一人の心に響き合う指導法の工夫

① 児童の実態把握　…　略

② 資料選択の工夫　…　略

③ 資料分析と発問の工夫　　資料分析により、資料の構造や登場人物の心の動き、予想される児童の反応等をとらえた。「どうでしたか。」という発問は児童の発想を大切にし、資料についてどの観点からでも共感を響き合わせようとした工夫である。教師は板書により児童の思考を構造化した。中心発問は、主人公の明の心の動きに自我関与させ、価値に即した様々な反応を響き合わせるための工夫である。

④ 話し合い活動の工夫　　「どうでしたか。」という発問で出された様々な共感を基に話し合いの枠組みを立てた。できるだけ児童に任せ、自分達で創りあげる授業であることを自覚させ、自発的に取り組ませる工夫である。それにより響き合う話し合い活動へ方向づけ、中心発問ではねらいに即した価値観が響き合う話し合い活動を深めさせた。

⑤ 板書の工夫　　一人一人の意見を大切にして、話し合いを深めるため、ネームプレートを使用した。

⑥ ワークシートの活用　…　略

⑦ 絵や写真の活用　　終末部分では写真を活用し、響き合いの余韻を残した。

(4) 展開の実際（響き合う発問と児童の反応）

T　どうでしたか。

C　最後のところで仲直りできたのがよかった。

C　明が進んで「僕、車いす運ぶよ。」と言ったのがえらかった。

C　明が言ったことで、男子と女子が仲直りできた。

C　明もえらいけど、その声を聞いて勇気を出して手伝った他の男子もえらい。

C　このクラスの男子と女子は、けんかばかりしていたけど、一人一人やさしいところがあったから仲直りできたのだと思う。

C　なぜ、冷やかしがはやったのだろう。

C　このクラスの人達は仲が悪くなってしまって、もうどうなってもいいと思って冷やかすようになった。

T　「ぼく、車いす運ぶの手伝うよ。」と言うまでの明の気持ちはどうだったでしょう。

C　手伝ってあげたいけど、まだ冷やかされるかな。

C　でも、言わないと仲直りできない。勇気をもって言おう。

C　クラスをまとめるためにも、ぼくが言おう。

C　また、楽しいムードのクラスに戻したい。

C　人目を気にしているが、みんなも仲良くなりたいと思っているだろう。

C　ここで協力しないと、仲直りの機会がない。思い切って言おう。

T　卒業の時、「いつまでも仲間」の文字を３６人はどんな思いで見つめただろう。

C　その言葉を胸に中学に行ってもがんばろう。

C　誰かが黒板に書かなくても、一人一人の心の中にある。

C　中学へ行っても、仲良くなれたことは良い思い出になる。

(5)　考察

○　性差の意識が強くなってきたこの時期、主人公の冷やかしを乗り越えてクラス集団を高めた言動は、一人一人の心に響いたようである。

○　「どうでしたか。」という発問で、児童は自分なりの考えや感じたことを伝え合い、響き合いを始めた。その際、児童の意見を構造化した板書により、一層深く資料をとらえ、響きを確かにしていった。自分達で創る授業という意識をもち、主体的に取り組み、自分なりの表現をすることができた。

○　「どうでしたか。」という発問の際の、価値に対する周辺発言は、資料に入る時、教師がよりしっかりと視点を与えること、又、児童に資料を見る力を育てていくことによって改善できる。

○　中心発問では、主人公の迷いに共感し、ねらいに迫る話し合いができ、響き合うことができた。

○　「かみしめる」段階では、ワークシートにメモした後、男女が協力できた経験を話し合った。多様な意見が出され、自分達のクラス集団や個々の良さを見直すことができた。

○　相互指名法は、その特徴をふまえ、効果的に活用する必要がある。

Ⅲ　児童の心をゆさぶる指導法の工夫（第３分科会）

1.　主題設定の理由

最近の児童は、知識は多くもっているが、生活に対する意欲や思考力、判断力が乏しく社会性に欠ける傾向があるといわれている。このような実態を考えると、２１世紀を心豊かにたくましく生きる児童を育成するために、学校教育の中でもとりわけ道徳教育が担う役割は大きいといえる。

しかし、その道徳教育の中核となる道徳の時間の現状はどうだろうか。昭和３３年に道徳が設けられ、３０年以上が経った。その間、先輩の先生方の豊富な実践には学ぶところが多くあった。資料を通して主人公の気持ちや行動を考えさせることにより、行為の底に流れている道徳的価値を捉えさせる、という指導法や指導過程の基本型が確立され、現在の道徳の時間の主流をなしているとも言えよう。しかし、私達は、日々の授業の展開において、いろいろと試行錯誤し、指導法を工夫してみるが、児童に問題を自分のこととして考えさせるのは難しい。そのため、建て前的な意見が述べられ本音が引き出せずに終わってしまうことも多いのである。

どうしてこのようになってしまうのだろうか。第３分科会では、児童に価値を内面的に受け止めさせ、自分自身の問題として真剣に考えさせる効果的な指導が十分にできていないからではないかと考えた。つまり、価値を「心が揺り動かされるほどに感じさせることができない」からだと考えたのである。

そこで、児童に目の覚めるような驚きや感動を与え、児童の心を根底からゆさぶることにより、より高い価値に向かって児童が主体的に変容していくのではないか。また、心をゆさぶられた児童は道徳的心情や判断力が高まり、より主体的に考えたり実践したりするのではないか、と考えたのである。そして、心をゆさぶる授業を通して、心豊かにたくましく生きる児童が育成できると考えた。

このような視点から、第３分科会では、「様々な角度から児童の心をゆさぶる」ことを考え、指導法や指導過程を見直し、改善を図っていくことにした。具体的には、・資料の吟味と開発、提示の工夫　・発問の工夫と精選　・多様な考え方を引き出す工夫などである。

児童の心をゆさぶり、自ら考え、判断し、どのような状況にあっても豊かな心をもって力強く生きぬく児童を育成することが今こそ大切であると考え、本主題を設定した。

2. 研究の内容と方法

(1) 研究の構想

全体研究主題

豊かな心を育てる道徳授業

分科会主題

児童の心をゆさぶる指導法の工夫

目指す児童像

自ら考え、判断し、どのような状況にあっても、豊かな心をもって、力強く生きぬく児童

仮説

指導過程において「児童の心をゆさぶる」指導法を工夫すれば、表面的であった考え方・感じ方が深まり、主体的に考え判断できる児童を育成することができる。

研究の内容

①「心をゆさぶる」の捉え方

② 心をゆさぶる指導法の工夫

- 資料の吟味、開発
- 資料提示の工夫
- 発問の工夫と精選
- 多様な考え方を引き出す工夫

検　証　授　業

指導法についての評価

(2) 研究の内容と方法

① 研究主題の設定

② 構造図（目指す児童像・仮説の設定）

③ 心をゆさぶるとは

④ 指導法の工夫

⑤ 授業研究（指導案の立案、内容の検討、検証授業の実施）

3. 児童の心をゆさぶる指導法

(1) 「心をゆさぶる」とは

「心をゆさぶる」ということを次のように考えた。

①ショック（驚きや感動）を与える。

②自分のこととして考えさせる。

③葛藤させる。

④いろいろな考え方に気付かせる。

⑤より深く考えさせる。

⑥課題意識をもたせ、これからの自分を見つめさせる。

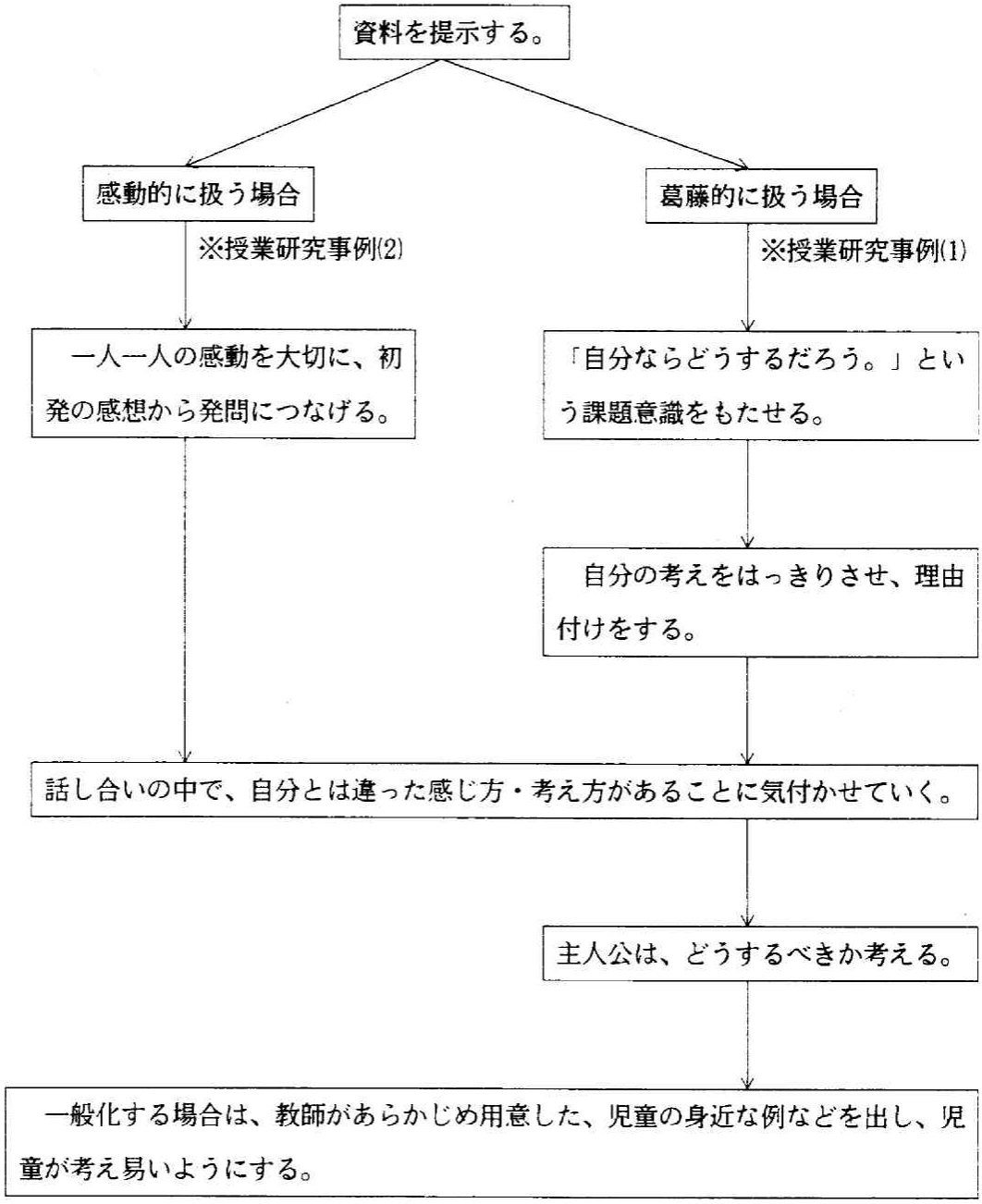
これらは、資料そのものから感じさせることもあれば、資料を通して話し合わせる中で考えさせることもある。また、教師の発問によって気付かせることもある。その点で、資料の選択は「心をゆさぶる」ための大切なポイントの一つである。さらに、友達の見方・考え方を知ることは、自分の見方・考え方を深める上で欠くことのできないことである。友達の話を聞き、「何か変だぞ。」「えっ、そんな考えもあるのか。」「なるほど。」「すごいなあ。」と感じさせることが、心をゆさぶることになると考える。

そして、心をゆさぶられた児童は、○一面的な見方・考え方から多面的な見方・考え方へ、○表面的な見方・考え方から内面的な見方・考え方へ、○主観的な見方・考え方から客観的な見方・考え方へ、あるいは、○具体的な見方・考え方から抽象的な見方・考え方、さらに具体的な見方・考え方へと変わっていき、より深く考えたり課題意識をもったりすることができるようになると考えた。

そのためには、まず自分の考えをもたせなければならない。その上で、友達の考えと比べ自分の考えを確立していくのである。自分の生き方を児童自身が主体的に考え、自分を高め実践していこうとする力を身に付けさせることが「心をゆさぶる」真の目的と考える。

(2) 心をゆさぶる指導法の工夫

心をゆさぶる指導という観点から、次のような展開の流れを考えた。



その他、次のような工夫も大切である。

① ねらいによっては事前調査をし、意図的指名を効果的に行う。

② 机の配置などの学習形態についても工夫し、話し合い活動を活発にさせる。

③ 導入・資料提示には、具体物や視聴覚機器を用い、五感に訴える。

④ 個を生かした魅力ある学習活動をするために、バズセッションや役割演技を取り入れる。

4. 授業研究事例

(1) 第6学年

① 主題　　生命の尊重（3－②生命尊重）

資料名　　「浩司と捨て猫」（自作資料）

② ねらい　生命についてより深く考えさせ、他の生命を大切にしていこうとする心情を高める。

③ 指導の意図

児童の形式的な考えをくだき、ゆさぶるために、指導者が開発した自作資料（捨て猫が増えて、処分に困っているというニュースを聞いて、判断に苦しむ主人公を描いた資料）を活用し、「葛藤的に扱う」展開を試みた。他人事でなく自分のこととして受け止め、今の自分にできることは何かを考えたり、自分の生命に対する想いを再確認させたりしたいと考え、次のような工夫をした。

○資料を的確に把握させ、思考がなるべく集中するよう、また、先を読んですぐに観念的な意見をもってしまうことのないよう、資料を分断して与えた。

○価値について、自己の問題としてより深く考えさせるために、「あなただったら」という発問で、他人まかせでなく一人一人がしっかり考えられるようにした。

○「授業のまとめをする場を全員に保障する」「評価に役立つ」という観点から、終末は自分なりの考えを書かせる時間を十分にとった。

④ 指導の実際

資料の前半を読ませた後、単純に「捨て猫がいたらえさをあげますか。」の発問では、ほぼ全員があげると言った。その後、野良猫にえさをあげる人がいるため、野良猫が増え施設で安楽死させている、という内容の後半を読ませた。「それでも自分ならえさをあげる」「それなら自分はえさをあげない」の2つのグループに分かれて話し合いをさせた。ほぼ同数に分かれた。自分なりの価値判断で立場をはっきりさせることができたが、活発に意見が出なかったため、教師がそれぞれの立場をゆさぶるような補助発問（目の前に死にそうな猫がいるんだよ。今えさをあげるとまた子猫を生んでしまうかもしれないよ。等）を投げかけた。話し合いの後、ワークシートに生命について書かせたところ、

「小さな生き物にも生命はある。生命の大切さを知った。」「生きることは、とてもすばらしい。」「自殺、人殺しは絶対やってはいけないこと。」等、迷いながらも自分な

りの表現で、ほとんどの児童が生命について深く考えていた。

⑤ 考察

○ 現実を突きつけた資料と、自分だったらどうするかという発問で、今まで身近に考えたことのなかった生命について、自分のこととして考えさせる機会を与えることができた。

○ 立場をはっきりさせた後の、ゆさぶる補助発問は効果的であった。

○ オープンエンドを試みたが、児童にとってはすっきりしなかったと思われる。

○ 本資料の場合、生命尊重で扱うとしたら、生きる芽ぶきを感じさせるような内容を付加する必要がある。

(2) 第5学年

① 主題　広い心で（2－④寛容・謙虚）

資料名　「銀のろうそく立て」

② ねらい　広い心で自分と異なる立場を理解し、思いやりのある態度で接しようとする心情を育てる。

③ 指導の意図

人間は、他人も自分も過ちを犯し易い弱い存在であると認める心をもつことによって初めて相手の間違いも許すことができる。つまり、自分に対して謙虚であるからこそ他人に対して寛容になることができるといえる。そこで、ゆさぶるポイントを次のように考え、「感動的に扱う」展開で授業を行った。

○ 本資料で広い心をもつのはミリエル司教ではあるが、司教の心は神に近く児童の実態とかけ離れていると思われたので、あえて、心の中に善も悪ももち合わせるジャン＝バルジャンに視点をあてた。ジャンの気持ちを通して人間の弱さや醜さに気付かせ、ジャンにうつる司教の心を通して広い心に気付かせたいと考えた。また、ジャンの気持ちを深く考えさせるために、資料を一部改作して臨んだ。

○ 雰囲気を盛り上げ資料にひたらせるためにＢＧＭを活用した。

○ 個を大切にするという観点から、一人一人の感動を大切にする発問をし、後の発問につなげようと試みた。

○ 児童の実態から見て、資料だけでは内容が難しく、ジャンが生来の悪人でないことに気付かせることができないと考えた。そこで、ジャンの生い立ちや投獄の理由について補足し、司教に泊めてもらう場面までを第1時とし、中心である後半を第2時と

する指導計画を立てた。

④　指導の実際（第２時のゆさぶる発問・反応）

Ｔ１（資料を読んで）どう思いましたか。

Ｃ　　司教はなんで形見の食器をあげたのか。

Ｃ　　これからのジャンはどんな生き方をしていくのだろうか。

Ｃ　　司教はどうしてジャンを許したのか。

Ｔ２　ジャンはどんな気持ちで銀の食器を盗んだのでしょうか。

Ｃ　　盗んでもいいのだろうか。

Ｃ　　盗むことは悪いと思うけれど、７人の子供たちや姉さんにおなかいっぱい食べさせてあげられる。

Ｔ３　司教に銀のろうそく立てを差し出され立ち尽くすジャンは、どんな気持ちになったでしょう。

Ｃ　　許してもらえてよかった。でも、ろうそく立てまでもらってもいいのだろうか。

Ｃ　　司教さんありがとう。これで姉さんたちのくらしを楽にしてあげられる。

Ｃ　　二度と悪いことはしません。約束したんだから。

Ｃ　　なんてやさしい人なんだ。司教さんのようにやさしい人になりたい。

⑤　考察

○　ジャンの気持ちに迫るためにゆさぶる発問構成をした結果、児童の心をゆさぶり、ジャンにうつる司教の心に気付かせることができた。しかし、第１時でジャンの生い立ちを話したことが、ねらいとする点（彼は根からの悪人ではない）を越え、ジャンの行為の裏付け（姉さんたちにパンを食べさせたい）のようになってしまった。補足資料は必要であったが、時間をかけすぎると強調されなくてもいいことまで強い印象を与えてしまう。感動的な資料は、できるだけ１時間で扱う方が効果的ではないか。

○　第１時で見せた銀の食器は、本時にも提示したかった。

○　ＢＧＭ（月光）は臨場感を高め、児童の心をゆさぶるためにも効果的であった。

○　ワークシートに書く時間を十分とった（８分）ので、どの児童も自分の考えを書くことができた。

○　Ｔ１の発問で、児童は教師の予想を上回り、ジャンのこの先の変容に気が付いていたようであり、変容を期待していた発言が多かった。初発の感想をその後の授業の展開にどう生かしていくのかが、今後の課題である。